



発行：社会福祉法人 小渦会
鳴門シーガル病院
発行 者：理事長 鎌田 啓三
住 所：徳島県鳴門市瀬戸町
堂浦字阿波井57番地
電 話：088-688-0011(代)
F A X：088-688-0314
U R L：http://k-seagull.jp/

かもめ便り

災害用移動炊飯器を贈呈

6月9日（日）午前9時30分から鳴門市瀬戸公民館で、鳴門市長並びに地区選出の県議会議員も出席され、「災害用移動炊飯器の贈呈式」が盛大に開催されました。

これは、当法人が瀬戸地区住民の「食」の支援体制の充実・強化と地域の防災力の向上をはかるために、平成23年度から日本赤十字社徳島県支部を通じて災害用移動炊飯器を設置する活動を行っており、今回の2台を含めてこれまでに計6台を設置しました。

贈呈式では、鎌田理事長が、「災害時のみならず地域の行事等でも大いに活用していただきたい」と挨拶を述べました。

その後、同炊飯器を使用して、炊き出し訓練による試食（うずしお鍋・おにぎり）が行われました。



小渦会春季運動会



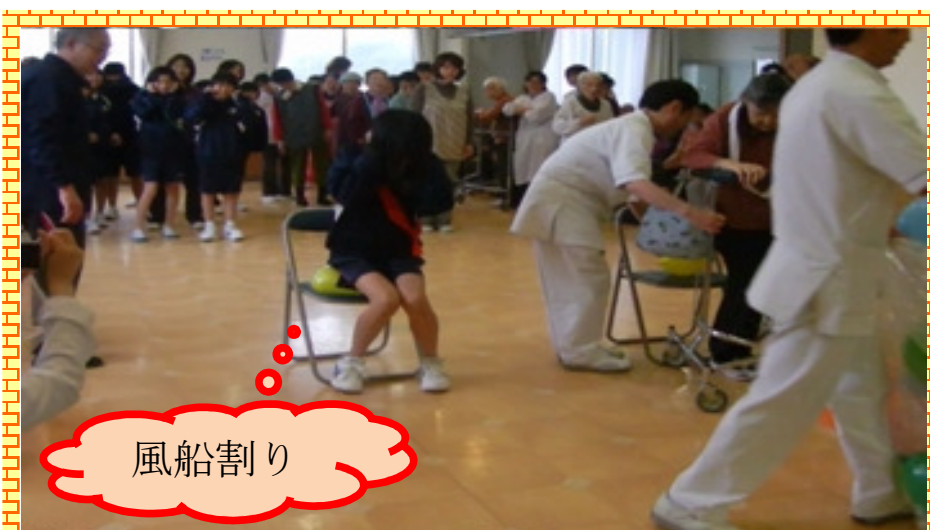
5月11日（土）鳴門シーガル病院で、恒例の『小渦会春季運動会』を開催いたしました。あいにく雨天の為、機能回復訓練室内での開催となりましたが、患者さん、瀬戸小児童、瀬戸中学校生徒、職員ともに綱引き、玉入れ、風船割り、青汁飲み、競争等に参加され、特に職員による仮装大会は、今年も大いに盛り上がりました。



綱引き



紅白球入れ



風船割り



仮装大会

グループホーム「ファミリー」を開設しました



5月1日（水）鳴門市撫養町に、グループホーム ファミリーを開設しました。ホーム名のように、「家族」のような、自然な温かさをモットー（信条）に、サービスの提供をしております。地域で暮らす、一人の住民としての考え方を重視し、孤立の防止や、少しでも生活の不安の軽減になるようスタッフがお世話させていただきます。一人暮らしの実現。またより自立した暮らしができるよう応援します！



営繕便り



～ 『営繕の要』 ～

今日は営繕の主力職員を紹介したいと思います。この記事を書いている私の年齢は40代ですが、毎日暑い日も寒い日も時には雨風や雪の日も外で頑張っているのが60代から70代のおじさん職員の方々です。私より職務経歴は短いですが、さすが年の功、日々学ぶ事が多く頼りになる方達です。そして何よりパワフル！私なんかでは、とても敵いません。良い手本が近くにいると背筋がピンと伸びる思いに



鳴門シーガル病院 公開講座を開催しました



「精神科医療スタッフのためのストレスマネジメント」

【座長】 (敬称略)
今井メンタルクリニック院長 今井幸三

【講演】
東京女子医科大学 精神医学講座教授 坂元 薫
大塚製薬株式会社徳島支店学術・応用開発課 片山由希
鳴門シーガル病院 医師 澤田和之



6月14日に東京女子医科大学精神科の坂元 薫教授をお迎えして、「精神科医療スタッフのためのストレスマネジメント」という題にて講演会が開かれました。医療従事者といっても生身の人間であることに変わりはないので、自分のことを気楽に相談できる体制の必要性を強調されていたことが印象に残りました。またご自身の専門分野である双極性障害では「躁の本質は悲しみである。」という鋭い洞察に思わず頷いてしまいました。講演は視覚、聴覚をフルに刺激される坂元流の演出が施され、最後まで飽きさせることなく聴衆を魅了いたしました。また鳴門シーガル病院に対して強い関心を持っていただき、今後の講演でも当院の話題をしていただけるとのことなので、この点からも坂元先生の動向から目が離せなく

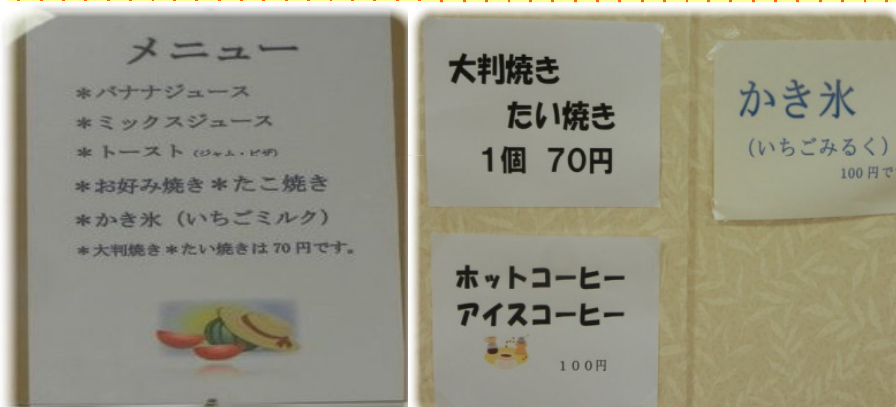
ホットステーション「つどい」

こんにちは、松原和明と申します。58歳です。退院して30年になります。縁あって「つどい」の見習いマスターになりました。接客業は生まれて初めてなので、よろしくお願い致します。退院してから15年ぐらい働きました。おっちょこちょいなのでご迷惑をかけることもあるでしょうが、お許し下さい。

松原和明

ホットステーション「つどい」に、新しい職員が仲間入りしました。松原さんの持ち前の明るさから、松原さんを慕ってくる患者さんも増え「つどい」には笑い声が絶えません。ガンバレ！松原マスター！！

地域連携室：PSW 津舟しのぶ



医療エッセイ



～ 死にまつわる物語 ～

6月14日に東京女子医科大学教授の坂元 薫先生をお迎えして、ストレスとうつ病を中心にご講演していただきました。坂元先生は知覧の特攻隊員の手記を挙げられ、生きたくても生きることができなかつた若者たちに触れられ、現代の死に急ぐ若者たちに警鐘を鳴らされました。今回はそれを踏まえて他人のために命を懸けた人々の逸話を紹介します。

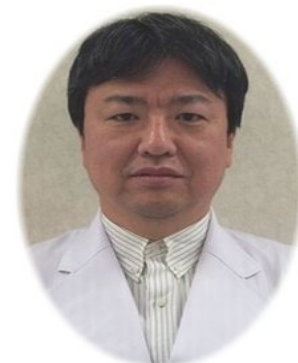
1945年4月、エルベ川東部に展開してアメリカ軍と対峙していたドイツ第12軍ヴァルター・ヴェンク将軍は参謀本部からベルリン救援命令を受ける。しかし圧倒的なソビエト赤軍に包囲されたベルリンにたどり着くことは事実上、不可能な状況であった。ヴェンクは部下の将兵にこう語った。「もはやベルリン、ドイツが問題ではない。戦闘とソ連軍から民衆を救うことが諸氏らの責務である。」忠誠・責任・連帯感で結ばれた第12軍はソ連軍の侵攻を押し返し、西への避難路を確保して25万人にも及ぶ避難民をアメリカ軍占領地に逃すことができた。一方、ソ連軍占領下は凄惨で過酷な運命に見舞われた。警察は政権に、軍隊は国家と国民に属する。ヴェンクと旗下の将兵はその鉄則に基づく行動をとった。プロイセン以来のドイツ国防軍は最後の輝きを放ってここで幕を閉じた。

その数か月後、千島列島の最北の島、占守島（しゅむしゅとう）ではポツダム宣言受諾後に攻撃をしてきたソ連軍に猛反撃を行っていた。戦争終結が決した後の戦闘なので抵抗せずに降伏する道もあったが、当時島には缶詰工場で働く400名ほどの女子工員が残されており、ソ連軍が上陸した場合に何が起こるかは自明の理であった。かき集めた船に彼女たちを乗せて北海道へ逃すため、第91師団は徹底抗戦を行う。船を爆撃するソビエト軍機にあらんかぎりの対空砲火を浴びせかけてこれを撃退。おかげで女性たちの大半は無事に北海道へたどり着けた。夜空に咲く花火のごとき砲火を最期に帝国陸軍も終焉を迎えた。

軍人なら国民を守るため、男なら婦女子を守るため自分の命を捧げる。普遍の大義であれば大いなる意味を感じて殉ずることができる。遺族は故人について胸を張って語り、周囲は畏敬の念をもってそれを称賛する。逝きし者と生きし者はともに美しい物語を共有し、その中で生き続ける。

一方、自殺が生むのは周囲の罪悪感と無力感、そして社会を覆う底知れぬ虚無感のみ……。

暗闇の中、そこに紡ぐべき物語は決して見えてくることはない。



医師 澤田和之

【編集後記】

『かもめ便り』第4号は、小渦会のイベント及び施設案内を中心に編集を行いました。

広報委員会一同
社会福祉法人 小渦会URL



鳴門シーガル病院 交通案内

- JR鳴門駅から「北泊・堂浦行」徳島バスで堂浦（どうのうら）下車(所要時間20分)利用
- 直営渡船(所要時間2分)利用 **TEL088-688-0011(代)**
- ◎ 渡船(無料)運航時間
午前7時30分から午後5時15分まで定時
(15分～30分おきに)運航しています。

